

## ブラフマダッタと猿の族長

昔、猿の一族がヒマラヤ山脈の山奥の人里離れた谷に住んでいた。彼らのすみかは、滑らかな岩肌を勢いよく流れる神聖なガンガー川のそばにあった。空気はランのかぐわしい香りがした。聞こえるのは、流れる水の奏でる音楽、鳥たちの喜びに満ちた歌、木々を渡る風の優しいささやき、そして幸福な猿たちのおしゃべりだけだった。

川のそばには、この上なく素晴らしい金色の果実がなる堂々たる古木があった。この果実は香りが良くてみずみずしく、柔らかく、とてもおいしかった。果実が熟すと、猿たちは木に登って遊び、みずみずしい果実を分け合い、その地の美と平和を満喫した。

猿たちの幸運は彼らの族長のおかげだった。族長はそれまでのどの猿よりも力強く情け深かった。彼は他の猿の倍以上も体が大きく、とても強く勇敢であると同時に、優しく慈悲深かった。そして非常に賢かった。この美しく豊かなすみかを見つけたのは彼であり、そこで彼の群れは繁栄してきたのだった。この族長は実のところ、ボーディサットヴァ（菩薩）、ブッダの化身であった。

ある日、族長が川の流れを見ていると、花が一つ木から落ちて流れに浮かんだ。この花はどこへ行くのだろうか。族長は、花が下流に住んでいる未知の種族のところへ流れて行くのを想像した——人間！ もし人間が花や金色の果実を見たら、彼らは木を自分たちのものにしようと考え、猿たちの安全なすみかは脅かされるに違いない。

族長は一族を集めて、予知した危険を話した。「毎年、私たちはすべての花と若い実を、川に張り出す枝から取り除かなければならない」と、彼は言った。「それは小さな犠牲だ。多くの枝は地面の上に広がっていて、そこに十分な量の実がなるだろう」

猿たちは族長の警告に従った。川に張り出している枝の花を摘むとき、若者たちはそれをゲームに変え、誰が最も多く集められるかを競い合った。族長は自分の岩に座り、彼らが遊ぶのを見てほほ笑んだ。

長い間、一族は繁栄し、他から多くの猿たちも加わった。皆、歓迎された。やがて、群れは8万匹を超えるほどに成長した。

何年もの間、猿たちは皆、果実が川に落ちることのないよう注意を払った。暑い季節には、族長と何匹かが川の上で果実が熟れることのないよう、昼も夜も木を点検した。しかし、その日は来た。一つの果実がアリの塚に隠れた葉の間で育った。誰にも気づかれることなくそれは水に落ちて流れ、岩の丘を通り、そして下流の谷に運ばれた。

その頃、何マイルも下流にあるカシの王国の首都で、国王ブラフマダッタは彼の宮殿で、気だるいぜいたくの中に住んでいた。彼は、すべての希望をかなえながらも大きな空虚さと果てしない欠乏感を感じ、供宴と娯楽でそれを満たそうとしていた。これが彼をひどく太らせ、ひどく退屈にさせていた。王がいくらかの満足を感じるのは、午後にガンガー川の冷たい水を浴びる時だけだった。毎日、彼の家来はワニから国王を守るために川の上流と下流に網を張った。

ある日の午後、ブラフマダッタが夏の太陽の焼け付くような暑さの中、川でくつろいでいると、網の一つに何かが引っかかっているのが見えた。「見たことのないものだ」と、彼は言っのろのろと指さした。「すぐにそれを持ってくるのだ！」

網を持つ漁師の一人は、その物体を回収するために川に歩いて入っていった。彼はそれを王のお付きの者に渡し、お付きの者はそれを王に見せた。それは赤みを帯びた緑色で、触ると柔らかく、ふっくらしていて、とても良い香りがした。王はそんなものは見たことがなかった。

「これは何だろう」と、彼は尋ねた。「果物のようだ。木こりと呼ばなさい。木に詳しいから知っているかもしれない」

木こりが到着したとき、国王ブラフマダッタは川岸に張った王室のテント下の日陰で待っていた。木こりは王に敬礼し、果物を注意深く見た。「王様」彼は言った。「これは

マンゴーという果実だと思います。聞いたことがあります。空気が澄み、水が清らかなヒマラヤ山脈の高地で育つもののはずです。マンゴーは食べられます」

「まずお前が味見しなさい」と、王は疑わしげに言った。「だが、ちょっとだけだ」と、欲張って付け加えた。

木こりがマンゴーを切ると、金色の肉は果物の甘い芳香を放った。ブラフマダッタは木こりが一口食べた後も無事なのを見ると、果実を取り上げて味わった。そのときには家来たちが王の周りに集まってきて、見知らぬ果物の一かけらを待ち望んだ。

「この果物は素晴らしい」と王は断言した。「比類なきものだ」

それから数分、数時間、数日が過ぎ、国王ブラフマダッタはマンゴーを食べたいという切望を抑えきれなくなった。毎晩、彼はネクターで満たされた金色の果実を枝にたわわに実らせる魅惑の木を夢見ている。それから幾晩か経ち、彼はもう我慢することができなくなった。「私はあの実のなる木を見つけなければならない」と王は宣言した。そして、彼は川を上流へさかのぼる探索に乗り出した。

旅は長く困難だった。男たちは、一年の最も暑い時期に川の流れに逆らって船をこいだ。21日目、太陽が西の地平線に近づいた頃、彼らはついにその驚くべき木に到達した。王の一行は目の前の豊かな光景に息をのんだ。川岸に立つその木の枝は果実をたわわに実らせ、地面に届くほど垂れていた。王と家来たちは、日が沈むまでごちそうを大いに楽しんだ。このおいしい果実に満足すると、近くにキャンプを張り、眠りについた。

満月が昇り、夜空は銀色に光り輝いた。真夜中に、若い猿のグループが木にやって来てマンゴーを食べ始めた。木を離れるときの猿たちの甲高い鳴き声で、ブラフマダッタが目覚めた。「猿め！」彼は叫んだ。「私のマンゴーを食べたに違いない」。彼は大臣を起こして言った。「明日、最強の弓部隊をマンゴーの木の下に見つからないよう隠れて待機させるのだ。猿たちが戻ってきたら、全部打ち落とすのだ。私のマンゴーを守らなければ」

グループからはぐれていた1匹の若い猿が王の計画を聞いて、族長のところへ一目散に走った。

「敬愛する族長、助けてください」と、恐怖で震えながら若い猿は言った。「実が川に落ちたに違いません。今や人がここにやって来て、私たちを殺し、マンゴーを独り占めする気です！ どうしたらいいでしょう」。その頃には、たくさんの猿が族長の周りに集まって、皆、泣き始めた。「どうしたらいいでしょう」

「私が愛するお前たちを守る」と、族長は優しく言った。「恐れるな、私の言う通りにしなさい」。皆を安心させ、力強い族長は一族をマンゴーの木に導いた。彼は一番高い枝に登り、風のように素早く100本の弓に等しい距離を越え対岸の木に飛び移った。その流れのふちで、彼は自分の飛んだ距離と同じくらい長いアシを見つけた。一族が激流の川を安全に渡れるように、それを橋として使おうとした。彼は、アシの一端を木に、そしてもう一方の端を自分の足に縛った。それから、彼は全エネルギーを集めて、マンゴーの木に戻るために飛んだ。

ところが何ということか！ マンゴーの木の枝をつかんだとき、彼はアシが短すぎたことに気がついた。対岸の木に縛り付けた分、長さが足りなくなったのだ。猿の族長の体は、手でマンゴーの木の枝をつかみ、足はアシに縛られた状態で引っ張られた。彼は橋の一部になってしまったのだ。勇敢にも彼は持ちこたえ、膨大な彼の一族に、「この橋を渡るのだ、そうすれば助かる」と大声で呼んだ。

1匹ずつ、猿たちは族長の体とアシを伝って安全な対岸に渡った。しかし、最後の猿は、この一族の族長になるという野望を秘めていた。このボーディサットヴァに悪意を秘めたライバルは、族長の背中にどさりと飛び乗り、背骨を砕いた。何も気にせずこの非道な猿は安全な場所へ逃げ、苦しむ族長を置き去りにした。

夜明けの明るさを増す光の中で、国王ブラフマダッタは、起こったことをすっかり見ていた。涙が彼の頬を伝わった。彼は、一族を救うために猿の族長が払った犠牲に深く心

を動かされた。それは単なる動物であり1匹の猿でありながら、王が知るどの人間よりも高潔だった。

「その猿を下ろしなさい」と彼は家来に命じた。「そして、敬意をもって彼を扱いなさい」

猿の族長は木の下に運ばれ、絹の布団に寝かされた。王は自らの手で猿の族長に水を飲ませた。王は、自分の賓客が楽になるためにできるだけのことをすると、質問をした。

「高潔な猿の族長よ、あなたは自分が助かることもできたはずですよ。その代わりに、あなたは他の猿が渡れるように自分の体を橋にした。あなたは彼らに自分の命をささげた。なぜそうしたのですか。あなたは誰ですか。そして、他の猿たちはあなたにとって何なのですか」

「おお王様」と猿は答えた。「私は彼らの族長、そして彼らを導く者です。私は彼らの父であり、私は彼らを愛しています。私の命は、彼らの自由と引き換えたら安いものです。死や束縛でさえも私の心を乱すことはないでしょう。なぜなら、私が見守ってきた者たちが今は安全なのだから」

ボーディサットヴァは一息つき、いま一度王に話しかけた。「もし私の死があなたへの教訓にもなるなら、国王、私はとても幸せです。あなたに伝えたいのは、あなたを王にするのはあなたの弓部隊の力ではなく、あなたの心の力である、ということです。賢明な統治者は、領地の人々皆の幸福を求めます。愛をもって統治してください。そうすれば、あなたは真の王になるでしょう。私がいなくなっても、ブラフマダッタよ、私の言葉を覚えていてください」

猿の族長は、やがて目を閉じ、息を引き取った。国王ブラフマダッタは頭を垂れた。静かに座る中で、王は偉大な存在の面前にいたことを悟った。祝福された者の英知は、彼の心の花弁を開いた。ブラフマダッタは今、何が彼の人生を意味あるものとするかを理解した。彼は、高潔な王になり献身と愛をもって人々のために務めることを決意した。

ボーディサットヴァをたたえて寺院を建て、彼の賢明な教えを決して忘れることのないようにした。その後何年も、カシの王国は繁栄し、そしてマンゴーの木がすべての庭に植えられ、皆がその甘い果実を味わうことができるようになった。

\*\*\*\*\*

「ブラフマダッタと猿の族長」は『ジャータカ』の物語の一つです。『ジャータカ』は、紀元前 300 年から紀元 400 年間の約 550 の寓話や逸話が集められたもので、ブッダの前世を語っています。これらの物語は仏教文学の本質的な見地であり、人間や動物の姿をとって現れるボーディサットヴァ（菩薩）の美德を称賛しています。